

# 直言

一九六六年八月十八日、北京の天安門前広場には紅衛兵の大軍が現れて世界を驚かせ、いわゆる文化大革命は熱狂的な高揚の局面に突入していった。あれからすでに九年が過ぎた

が、この間、中国では、奪権闘争、林彪異変、批林批孔運動など政治的動搖が絶えなかつた。しかし、昨秋以来は、去る一月

に十年ぶりで開かれた全国人民代表大会をばざんで、比較的平穩な時期が続いたのであるが、その最大の理由は、毛・周以後の時代への移行期を平穩に過ごそつとという暗黙の合意であり、このことが政治的激動へのある

種の歯止めになつていたように思われる。つまり、天寿をまっとうせんとする嚴父のまゝで遺産相続をめぐるイサコサを起すのは避けようという合意であつたように思われる。

とはいえ、全国人民代表大会

## 中国の暑い夏

か「国家外交」での分岐がほのみえたり、鄧小平副総理ら復活幹部を批判し、江青夫人を擁護する文書がばらまかれたり、やはり内部に問題はくすぶりつけていた。

そのような矢先、今月になる

なかじま 中嶋 嶺雄

が終わるとまもなく、姚文元、張春橋らの文革幹部が相次いで大論文を発表したり、この三月には江青夫人が北京で周総理をだしぬかんばかりの外交講話をおこなったり、インドシナでの勝利に直面して「革命外交」

が終わるとまもなく、姚文元、張春橋らの文革幹部が相次いで大論文を発表したり、この三月には江青夫人が北京で周総理をだしぬかんばかりの外交講話をおこなったり、インドシナでの勝利に直面して「革命外交」の深刻な状況にあつたよつであ

る。党中央は、これらの抗争を「ブルジョア派閥主義」によるものとして秩序の回復と党の団結を訴えているが、これまで四川省や雲南省、チベット自治区などでも混乱や抗争が伝えられていただけに、これらの一連の地方の混乱が北京の路線闘争とどのようにかかわっているのか、大いに注目に価しよう。文革期の奪権闘争や林彪異変にもみられたように地方の抗争が中央の角豪と無関係であり得ないところに中国政治の特色があるように思われるからである。中国はまたまた、暑い夏の最中なのであつたか。

(東京外大助教授)